

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34701

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12512

研究課題名(和文) 聖教から見た鎌倉後期の公武権力と真言密教

研究課題名(英文) The Imperial Court, the Shogunate, and Shingon Esoteric Buddhism in the Late Kamakura Period as Seen in Esoteric Buddhist Scriptures

研究代表者

坂口 太郎 (Sakaguchi, Taro)

高野山大学・文学部・准教授

研究者番号：50724142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、真言密教の寺院に伝来した聖教を通して、鎌倉後期(1260年代～1330年代)の公武権力をめぐる政治史を再考した。とくに、密教聖教から発掘した新事実に基づいて、鎌倉後期の通史叙述を刷新するとともに、後醍醐天皇の討幕運動を諫めたことで有名な「吉田定房奏状」の成立背景について解明した。さらに、高野山に伝来した密教聖教・古文書の調査にも取り組み、『別尊要記』第4帖(金剛三昧院蔵)、『西南院文書』第1巻～第6巻、『保寿院流血脈私』(ともに西南院蔵)などの全文を紹介した。あわせて、高野山一心院と公武権力の密接な関係を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未翻刻史料が多い鎌倉後期(1260年代～1330年代)は、前後の時代に比べて具体的なイメージを描きにくく、公武権力をめぐる政治過程にいたっては、いまなお戦前の研究に依拠せざるをえない面が大きい。その意味で、本研究が政治過程の叙述に際して、学界未活用の史料群というべき密教聖教に目を配って新知見を得たことは、十分な新規性と独自性を備えるものである。また、高野山の子院(金剛三昧院・西南院)に伝来した密教聖教・古文書は、これまで十分な調査がなされていなかっただけに、本研究の過程で重要な価値を帯びる史料を紹介したことは、学界のみならず社会に対して、高野山伝来史料の持つ意義を改めて再認識させたといえよう。

研究成果の概要(英文)：In this research, I reconsidered the political history of the imperial court and the shogunate in the late Kamakura period (1260s-1330s) through the study of the Esoteric Buddhist scriptures that were transmitted to the temples of Shingon Esoteric Buddhism. In addition to revamping the historical narrative, I considered the background of the writing of "Yoshida Sadafusa Sojo", which is famous for admonishing the anti-shogunate movement of Emperor Go-daigo. Moreover, I also worked on research on Esoteric Buddhist scriptures and Historical manuscripts that were transmitted to Koyasan. I introduced the full text of Besson yoki Vol.4 (Kongosanmai-in Possession) and Sainan-in Monjo Vols.1 - 6 and Hojuin-ryu-kechimyaku-watakushi (both, Sainan-in Possession). At the same time, I pointed out the close relationship between Koyasan Isshin-in Temple and the imperial court and the shogunate.

研究分野：日本中世史

キーワード：鎌倉後期 公武政権 後宇多院 後醍醐天皇 「吉田定房奏状」 保寿院流血玉方高野伝 『保寿院流血脈私』 『西南院文書』

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

黒田俊雄による権門体制論・顕密体制論の提起以後、日本中世のイメージは大きく変化した。ただし、権門体制論は、公家・武家・寺社による相互補完という観点から、中世国家の構造を説明する点に特徴があるが、この三者の鼎立構造は鎌倉中期までしか実態を持たない。上横手雅敬は、権門体制の解体の契機を、北条氏得宗（時宗・貞時・高時）による専制政治、さらに後醍醐天皇による建武政権の登場に求めており、この指摘に鑑みるならば、鎌倉後期（1260年代～1330年代）についての多角的な究明が、中世の変化を考える上で重要な課題となる。

とくに、鎌倉後期の公武権力の特徴を考える上では、モンゴル襲来を契機として、顕密仏教との関係が緊密化することが見逃せない。王権では、即位灌頂のように、天皇の即位儀礼にまで密教的な要素が取り入れられるようになった。また、治天の君（院・天皇）の多くは、密教に深く傾倒しており、後醍醐天皇などは、政敵である鎌倉幕府の打倒を目指して、調伏祈禱を自ら行なっている。幕府にかんしても、鎌倉後期に入ると、顕密仏教への保護政策を積極的に展開する。得宗の北条貞時は、鎌倉に下向した真言僧から真言の伝授まで受けていた。

以上のような鎌倉後期の王権・幕府と顕密仏教（とくに密教）の関係は、同時期の政治史の展開にも大きな影響を与えている。よって、両統迭立から南北朝動乱前夜に至る過程を考える上では、古記録・古文書のみならず、寺院側で成立した聖教史料にも目を配り、実証的な研究を進めることが必要となる。

2. 研究の目的

鎌倉時代の政治史・仏教史の研究は、前期（1180年代～1250年代）に比して、後期（1260年代～1330年代）が不振な状況が続いている。その大きな理由として、関係史料の発掘が必ずしも進展しておらず、具体的なイメージを描きにくいという点がある。

そこで本研究では、真言密教寺院に伝来した聖教史料を素材として、原本・写本類の調査に基づいた実証的な方法から検討を加えていく。モンゴル襲来以降、王権・幕府は、ともに密教と緊密な関係を結んだことで知られる。密教寺院に伝来した聖教には、後宇多院・後醍醐天皇や北条氏得宗（時宗・貞時・高時）の動向を伝える史料が数多く残されている。密教との政治的関係から鎌倉後期の公武権力を照射することで、鎌倉後期の政治史研究が抱える閉塞状況にも一石を投じることが可能となろう。同時期の政治史研究や仏教史研究に新たな成果をもたらし、中世の転換点となった鎌倉後期の時代相を炙り出したい。

3. 研究の方法

従来の中世史研究では、古文書・古記録などの史料群を主たる素材として、多くの成果が積み上げられてきた。その一方、古典籍についての文献学的な研究は立ち遅れており、その活用も十分とはいえない。本研究の素材となる聖教史料に関していえば、中世史の研究全体における認知度はさほど高いとはいえない。

このような現状に対して、本研究は、密教寺院に眠る聖教を幅広く調査し、その成果に基づいて史実に肉迫する研究手法を取る点に、学術的な独自性と萌芽性を持つ。これは、既往の研究が提示した歴史像を塗り替える上で、強力な武器となる。

また、本研究の特色は、政治史研究と仏教史研究とを、有機的に接続させる点にある。とくに、聖教史料を切り口とする研究視角は、国文学や美術史など、歴史学以外の学問分野とも連関する点で、少なからぬ波及効果を備えている。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、(1) 密教聖教を用いた鎌倉後期の政治史の研究、(2) 中世前期の密教聖教・古文書の調査・翻刻、これら2つに大別できる。以下、著書や学術誌に発表した成果を中心に、それぞれの概要を略述する。

(1) 密教聖教を用いた鎌倉後期の政治史の解明

まず、野口実・長村祥知両氏とともに、共著『京都の中世史』第3巻 公武政権の競合と協調を執筆した。研究代表者の担当は、文永9年(1272)の後嵯峨院の死から元亨4年(1224)の土岐騒動(正中の変)までであり、鎌倉後期の公武関係について最新の研究成果にもとづいた叙述を心がけた。とくに、伏見親政期・後宇多院政期・後醍醐親政期については、従来知られていなかった密教聖教(修法・伝法灌頂の記録、法流の血脈など)を用いることで、各段階の政界における人的関係に新知見を提示できた。

また、「吉田定房奏状」(醍醐寺蔵『浄修坊雑日記』所収)について論文を執筆した。この「奏状」は、吉田定房が後醍醐天皇に討幕計画を諫めた意見書として知られるが、上奏年代については諸説がある。現在、元応2年(1320)初稿上奏、元亨元年(元応3年、1321)改稿上奏という、村井章介氏の見解が有力であるが、原文の厳密な解釈にもとづいてその妥当性のないことを論証し、かつて松本周二・村田正志両氏が提唱した元徳2年(1330)6月成立説こそ、適切であることを述べた。そして、新出の密教聖教である『如愛記』にもとづいて、吉田定房とその父経長が、後醍醐天皇の乳父(傳育者)であったことを解明し、定房による諫言の動機に、後醍醐の身の上を案じる定房の憂慮があったと論じた。

さらに、鎌倉後期の鎌倉幕府と真言密教の関係については、鎌倉幕府に仕えた真言僧である頼助について調査を進めた。とくに、頼助が如意宝珠(中世密教で最重視された重宝)を所持していたことに注目し、その宝珠がかつて俊乗房重源の感得した宝珠であったことを明らかにした。頼助は鎌倉幕府の宗教的護持に携わった北条氏出身僧であるだけに、この事実は、鎌倉幕府と密教との関係を考える上でも、重要な論点をなすものと考えられる。

なお、2020年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大という不測の事態が発生したため、当初の研究計画を変更せざるを得なかったことを付記しておく。

(2) 中世前期の密教聖教・古文書の調査・翻刻・解題

次に、高野山に伝来した密教聖教や古文書についても調査に取り組んだ。学術誌で全文を紹介したものに、①『別尊要記』第4帖(金剛三昧院蔵)、②『重要文化財 西南院文書』第1巻～第6巻(西南院蔵)、③『保寿院流血脈私』(西南院蔵)がある。

①は院政期の心覚の撰述にかかり、中世前期の真言密教で尊重された事相書である。とくに、同書が『雑筆要集』(中世前期の文例集)にも利用されたことを指摘し、『雑筆要集』が寺院社会で成立した可能性も論じた。②は高野山西南院に伝来した文書であり、中世前期の撰関一条家と高野山平等心院(のち西南院)の密接な関係を物語る上、正和2年(1313)の後宇多院による高野御幸に従った供奉人の交名も含む点で貴重である。

③は、従来知られていなかった古血脈であり、高野山一心院において継承された保寿院流金玉方高野伝という法流の継承過程を詳しく記載する。高野伝に列なる僧侶には、鎌倉後期から南北朝期の公武権力と密接な関係を結んだ人物もいることから、法流全体の基本史料が出現した意義は少なくない。これによって、高野伝の拠点であった一心院とその院内の寂静院が、中世前期の高野山史において注目すべき存在であったことが、明らかとなった。

なお、高野山西南院における史料調査で、後醍醐天皇の護持僧であった文観が作成した印信（「文観房弘真授有源許可灌頂印信紹文」）を見いだせた。正平3年（1348）3月19日に、文観が有源という僧（高野山僧か）に授けたもので、文観と高野山の関係を示唆する貴重な新史料として貴重である。これについては、「毎日新聞（和歌山版）」2020年11月25日朝刊で報道され、多くの注目を集めた。これを含めて、本研究の過程で発見した新史料については、今後学術誌などで順次紹介していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 坂口太郎・藤本孝一	4. 巻 33
2. 論文標題 重要文化財『西南院文書』第五巻・第六巻	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 135-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂口太郎	4. 巻 677
2. 論文標題 「吉田定房奏状」再考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 655-678
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂口太郎	4. 巻 32
2. 論文標題 重要文化財『西南院文書』第四巻	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 122-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂口太郎	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 中世前期の保寿院流金玉方高野伝と高野山一心院 高野山西南院蔵『保寿院流血脈私』の紹介とあわせて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藝林	6. 最初と最後の頁 106 - 164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂口太郎・藤本孝一	4. 巻 30
2. 論文標題 重要文化財『西南院文書』第一巻～第三巻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 142 - 169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中世密教聖教研究会	4. 巻 32
2. 論文標題 高野山金剛三昧院所蔵『別尊要記』第四帖 翻刻・影印・解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高野山大学密教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 5-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂口太郎	4. 巻 32
2. 論文標題 『別尊要記』第四帖解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高野山大学密教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 坂口太郎
2. 発表標題 「吉田定房奏状」再考
3. 学会等名 軍記・語り物研究会 2018年度大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野口実・長村祥知・坂口太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 301
3. 書名 『京都の中世史』第3巻 公武政権の競合と協調	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------